

ヨーロッパに現存する木製銅版画プレス機の調査

神谷佳男

はじめに

1645年アブラム・ボスが著した腐蝕銅版画技法書『Traité des Manières de Graver en Taille-Douce sur l'Airin par le Moyen des Eaux Fortes, & des Vernix Durs & Mols. Ensemble de la façon d'en Imprimer les Planches & d'en Construire la Presse, & autres choses concernans lesdits Arts』(以下『腐蝕銅版画技法』(1645)と略記)には、銅版画プレス機とその構成部品の図版とともにプレス機製作に必要な情報が詳細に述べられている。

筆者らが前出の技法書の翻訳¹に取り組んでいた頃、東京藝術大学美術館所蔵の木製銅版画プレス機を見る機会を得た。ボスの時代、プレス機と言えば木製だが、今日では金属製プレス機しかお目にかからない。以来、木製銅版画プレス機に興味を抱くようになった。しかし、木製プレス機に関する情報収集を始めたものの入手し難く、また銅版画用木製プレス機自体あまり数多く存在しないことがわかった²。オランダのアド・ステインマン氏は、フランスやベルギーなどヨーロッパにある木製銅版画プレス機18台の存在を確認しているようである³。

木製銅版画プレス機がどのように保管されているのか。また現在でも使用されているのか。版画に携わる者として非常に気にかかる。

本稿は、筆者がヨーロッパの美術館・博物館を訪問した際の、幾つかの木製銅版画プレス機の実態及び実測調査の記録である。ここでは、ベルギーのナムュールにあるフェリシアン・ロップス美術館が所蔵する木製銅版画プレス機とブリュッセルの印刷博物館にある1台を取り上げる。

木製銅版画プレス機の実測調査

木製銅版画プレス機とは

銅版画用プレス機は、わずか1ミリないし数ミリの厚さの金属板上につくられた浅い溝(凹部)に詰められたインクを、紙に写し取るためのものである。

強い印刷圧を必要とし、そのため円圧印刷機(シリンダ印刷機)の構造を持つ。木製銅版画プレス機は、ボルトなどの金具を除き円筒形のローラーや回転ハンドルなどすべて木製で、我々の知る金属製銅版画プレス機同様、2本のローラーの間に銅版を通過させる構造になっている。



図1

ボスの木製銅版画プレス機

画家や版画家のための銅版画技法書は今日まで多数出版されているが、腐蝕液や防蝕被膜の製法、プレス機製作など、広範囲でしかも詳細に書かれているものは、唯一ボスの『腐蝕銅版画技法』（1645）ではないかと筆者は考える。

図1は、ボスの『腐蝕銅版画技法』（1645）の中にある16枚の図版のうち一枚である。同図版は、1701年セバスチャン・ル・クレールが『腐蝕銅版画技法』第二版⁴を出版した時にも使用されたが、ボスの初版からちょうど100年後のコシャン版と呼ばれる大幅改定された『腐蝕銅版画技法』第三版（1745）⁵では姿を消し、ボスが描いたプレス機とは異なるプレス機の図版に差し替えられてしまう。蛇足だが、ボスは複数の図版を用いてプレス機の多くの部品に寸法を詳細に記入していたが（図2）、コシャン版では省略されてしまった。プレス機の陰の表現部分にある数字は読み取り難く、また数字を書き加えると図版が煩雑になるとの理由から削除されたのである。ちなみに、第三版ではコンパスを使用

すれば部品のプロポーシオンを知ることはできるとコシャンは述べている⁶。

『腐蝕銅版画技法』（1645）は、その後ヨーロッパ各国で翻訳され版を重ね普及し、多くの銅版画家に影響を与えた。この事実を考慮すると、ボスのプレス機は世界中に点在する木製銅版画プレス機の原型と位置付けられ、本稿でも他のプレス機との比較に際して、そのように扱った。

『腐蝕銅版画技法』（1645）の中で、ボスは長さの単位としてpied（ピエ）、pouce（プース）、ligne（リーニュ）を使用しているが、本稿では1ピエを325mmとして換算した。

ボスのプレス機は、高さは1410mm、横幅802mm（ハンドル部を除く）、脚部の長さ1245mm、ローラーの横幅620mm、直径189mm（上下2本とも同サイズ）、回転ハンドルの全長1490mm、床から回転ハンドル軸の中心までの高さが920mmとなっている。

我々がベッドプレートと呼んでいる台板は、長さ1056mm、幅581mm、厚さ40mmである。

ボスのプレス機の構造自体、今日我々の知る金属製銅版画プレス機とさほど相違ないように思われる。しかし、ローラーの軸受けの役割を果たす垂直に立った一対の支柱には、上下のローラーを支える軸受け用の孔が、各々二箇所ずつ合計四箇所刳り貫かれていること。また、シリンダー部の上下二本のローラーの直径が同じであること。以上の二点が、ボスのプレス機の特徴といえる。100年後の1745年の第三版の図版では、上部ローラーに比べ下部ローラーの径が大きくなっている。このことについては、「ハンドルを回すことが容易になり、印刷圧も上手くいき作品の仕上がりがさらに美しくなる」とコシャンは述べている⁷。

図1で若い刷り師が大きな十字ハンドルを手と足を使って力一杯回している様子が描かれているように、回転ハンドルがローラー軸と直結している場合、ハンドルを回すのに強い力を必要とする。

回転ハンドルの負担を軽減するためには、ベッドプレートの摩擦を少しでも減らすことが重要だと考えたボスは、ベッドプレートが2本のローラーの間

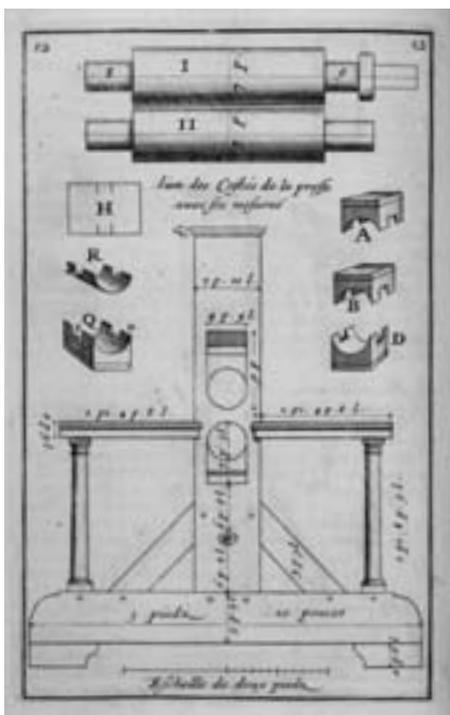


図2

を通過する際に、腕部の横木から30mmほど浮いた状態になるよう下部のシリンダーを高め保つように注意を喚起していることは、非常に興味深い⁸。

フェリシアン・ロップス美術館所蔵の 木製銅版画プレス機

画家であり数多くの版画作品を制作したことで知られているベルギー人、フェリシアン・ロップスの美術館がベルギーのナミュールにある。(Musée Provincial Félician Rops, Rue Fumal 12, 5000 Namur)

フェリシアン・ロップス美術館には、木製銅版画プレス機が1台あると聞いていた。同館を2008年1月に訪問した時、美術館1階受付前にそれは置かれていた。図3は、フェリシアン・ロップス美術館正面から見た美術館全体の写真である。入り口左の自転車がおかれている窓から館内を覗き込んでも、プレス機が見える。同機は使用されていない様子で、ベッドプレートの上には美術館のポスターやチラシが並べてあった。

図4及び5は、同館で撮影した木製銅版画プレス機の写真である。堅牢で、回転ハンドルが大きいことに気付く。同機は、高さは1590mm、横幅(ハンドル部を除く)750mm、脚部の長さ1485mm、ローラーの横幅470mm、直径は下部ローラーが216mm、上部ローラーが214mm、回転ハンドルの全長1920mm、床から回転ハンドル軸の中心までの高さは990mmとなっている。ベッドプレートの長さとは幅はそれぞれ1100mm、400mm、厚さはおおよそ33mmとなっている。図5を見ると同プレートが腕部の横木から若干浮き上がった状態であることが確認できる。2本のローラー軸を支える支柱の中心部の削り貫き部は高さは700mm、幅105mm、軸受け部品及び上下2本のローラーは鉄製である。

ここナミュールにあるプレス機の回転ハンドルは、本体に対し大きい。ハンドルの回転時、ハンドルの先端と床との距離がわずか30mmしかない。

またローラーの軸受けの形状は、ボスの図版と比

較した場合、上下2本のローラーを別々の軸受けに収めるボスのそれではなく、細長く一体化した直方体に削り貫かれている。軸受け金具と厚紙や木によって軸の高さや圧力を調整可能とし、プレス機の重要な部品であるローラーの交換に伴う直径の変化にも柔軟に対応できるものとなっている。(図4、5)

1745年の『腐蝕銅版画技法』(コシャン版1745)には、直方体の削り貫き部の寸法の目安として高さ540mmから648mm、幅135mmから162mmと書かれているが⁹、ナミュールのプレス機では高さが700mmもある。従って直径のさらに大きいローラーを使用する場合の対応も、可能となる。

図6では、ローラーと軸受けの上下とも、鉄製であることがわかる。割れたりかけたりする木製ローラーを、耐久性があり重みのある金属製ローラーに交換したと推測される。鉄製ローラーを使用することで、軸受けにもかなりの過重がかかるため、頑丈な鉄製の軸受けが使用されたのであろう。軸受け上部には、大量の厚紙が、軸受け下部には、厚紙と木片が挟み込まれている。厚紙が、圧力のクッション材として重要な役割を果たしている。

図7は、プレス機の天板を撮影したもの。ローラーの軸をしっかりと支える役目を担う一対の支柱を繋ぐ天板は、支柱下部にある下板と対をなし、上下で絞り込むようにプレス機を固定する必要不可欠な部品である。

天板上部左に、穴が一つあいているのに気付く。おそらく四箇所あったものが、現在三箇所が既に埋められている。これらの穴は何に使われたのか?以前アントワープのプランタン・モレトゥス博物館で見た木製手引き印刷機を思い出す。印刷機を固定するため、印刷室の天井からあて木が渡されていた。ナミュールのプレス機も同じ理由により、工房でしっかりと固定され使用されていたのだろう。銅版画プレス機には、作業の過程で回転ハンドルを回すたびに本体に強い力がかかり、木製であるという軽さゆえ不安定な状態だったと思われる。また回転ハンドルには乾燥した黒インクや滑り止めの樹脂の粉末のようなものが層になって付着しているところを見



図3 フェリシアン・ロップス美術館（正面）



図5 木製銅版画プレス機（側面）



図4 木製銅版画プレス機



図6 金属製のローラーと軸受け



図7 プレス機の天板

ると、同機はかなり使い込まれたと思われる。

もう一つの木製銅版画プレス機

ナミュールの美術館を出発しようとして関係者に挨拶をしていたときのこと、一人の従業員が突然「私たちがキュージヌと呼んでいるところに、実はもう一台プレス機があります」という。美術館で働いている人たちが休憩に利用する台所兼休憩室という部屋の隅に、プレス機はあった。慌てて写真に収めたが(図8)、プレス機の部品の詳細を採寸する時間の余裕がなかった。ローラー部は、虫食いの穴だらけで近年細く削られたような木の色を呈していた。

プレス機の高さ1280mm、幅680mm、脚部の長さ790mmの小型プレス機で、回転ハンドルもベッドプレートも見当たらなかった。手で持ち上げてみると、かなり軽いプレス機という印象を持った。

ブリュッセルの印刷博物館所蔵の木製銅版画プレス機

ベルギーのブリュッセルにある印刷博物館(Musée de l'Imprimerie, 4 Boulevard de l'Empereur, 1000 Bruxelles)は、図書館と印刷博物館が建物を共有しており、印刷博物館に来たという印象を与えない。同館所蔵の木製銅版画プレス機は、閲覧室に通じる廊下に展示されている(図9)。

ここではプレス機の上に二枚の貼り紙があり、一枚は「プレス機の上に荷物を置かないでください」という注意書き、もう一枚が展示品の説明書き。「このプレス機は、ナミュール出身のベルギー人版画家フェリシアン・ロップスが所有していたものと一般的に考えられている。」¹⁰と解説されているが、プレス機がいつ製作されたのかは書かれていない。

プレス機の由来等資料があるかどうか、学芸員のトノン氏(Patricia THONON)に問い合わせたことがある。あいにく不明との返答だった。

ブリュッセルのプレス機は、高さ1605mm、幅(ハンドル部を除く)690mm、脚部の長さ1190mm、下部ローラーの幅455mm、直径214mm、上部ローラーの

幅が450mm、直径236mm、回転ハンドルの直径1380mm、床から回転ハンドル軸の中心までの高さ730mm、床と回転ハンドルの先端との距離は40mmとなっている。2本のローラー軸を支える支柱の中心部の削り貫きの高さは985mm、幅125mm、軸受け部は金属板で覆われた木製、上下2本のローラーも木製である。ベッドプレートは、長さ1180mm、幅415mm、厚さ30mmである。



図8



図9

「PERNET」と書かれた焼印が支柱にある。

ブリュッセルでは、下部ローラーに回転ハンドルが接続され、ローラーの直径も上部のそれより細くなっている。しかし、筆者が現在まで見てきた木製銅版画プレス機は、ブリュッセルを除いて、回転ハンドルは常に上部ローラーに接続され、下部ローラーの直径は同じか、より大きくなっていた¹⁾。

ローラー部を上下間違えてセットしたのか、あるいは理由あつてのことかは不明である。

ボスの木製銅版画プレス機との比較

ナミュールとブリュッセルの各々のプレス機とボスのそれについては、数値で表したが、図面により大きさを比較する。予めことわっておくべきだったが、採寸の対象は古い木製プレス機であったこと。時間と共に木は乾燥し、また実際使用されたことで無理な力がかかり、部品にねじれが生じ変形した可能性があること。プレス機を構築する各々の木製部品を採寸したものの、一対になった部品でさえも必

ずしも同じ大きさではなく、5mm程度の差が生じる場合もあった。プレス機を構成している個々の部品を組み立て、最終的に眼前にあるプレス機のように復元できるために、木の歪みは排除した。

古い銅版画プレス機を一度解体し再度組み立てようとしたところで、全く同じ部品を利用するにもかかわらず、もはやプレス機は元には戻らない可能性があるだろう。乾燥による木の歪みなど、図面に表せない。

図10では左からボスのプレス機、ブリュッセルのプレス機、そして右がナミュールのプレス機の側面図である。ベッドプレートを加え、印刷可能な状態のプレス機の側面図に改めた。従って、図2のボスのプレス機の側面図と比較した場合、図10ではプレス機のローラー軸の位置が異なっている。ボスはベッドプレートを描かずにローラーの軸の位置を示したためである。ベッドプレートは、床から約83cm～87cmの高さで、三機ともそれ程差異はない。人のモジュールに合わせて製作されているためであろう。ブリュッセルとナミュールのプレス機では、ローラーの軸を支える支柱は、ボスのプレス機では軸受けが二段に

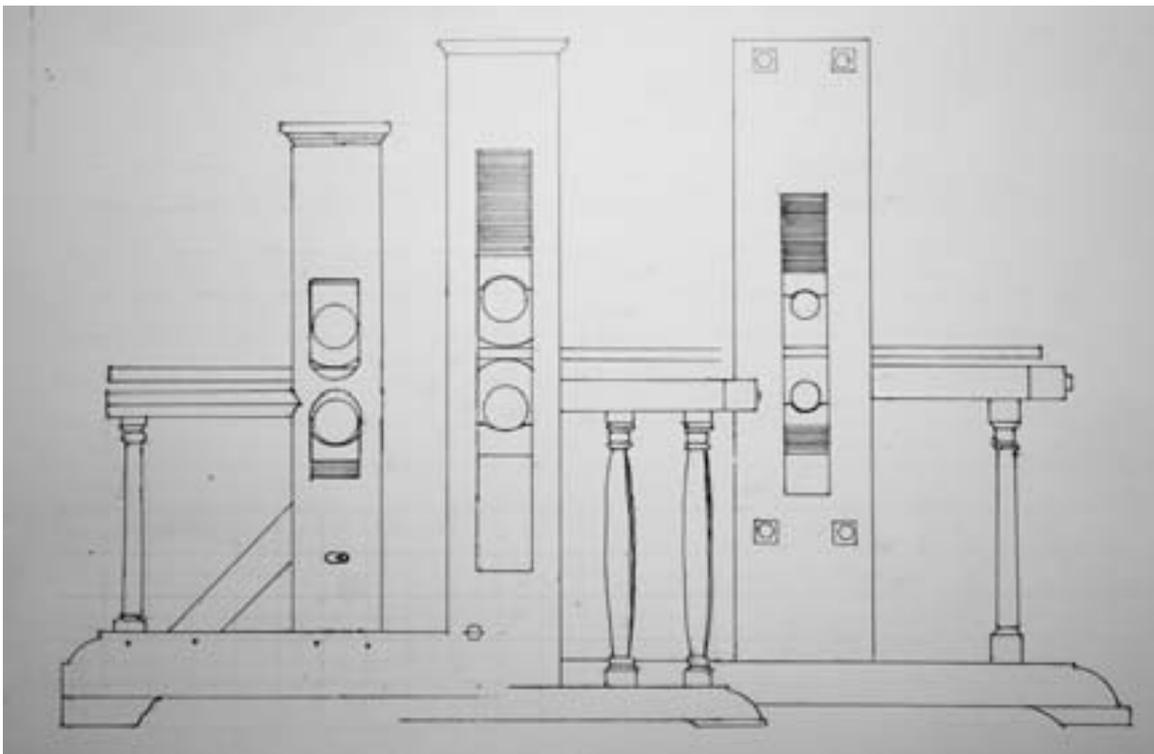


図10

分かれているのに対し、一体型で直方体型の削り貫き部になっている。それぞれのローラーの軸受け上部と下部には多くの厚紙（カルトン）を詰めることができる。ベッドプレートの厚さやフェルトの厚さの変化にともなう軸の高さや圧力の変化に対し、調整可能となる。また直径の異なるローラー部品の交換にも対応しやすい仕組みになっている。

図5と図9のプレス機のベッドプレートの端を見ていただきたい。このように端が次第に薄くなっていると、上下2本のローラーに挟まれたベッドプレートに十分な圧力を与えながらベッドプレートを上手くセットできる。ボスには、ベッドプレートの端を薄く処理するという指示はなく、フェルトをずらして順に重ねて印刷するように助言しているだけだ。時代の変化とともに、プレス機にも工夫が施され改良されていく。

おわりに

アムステルダムのレンブラントハウスで、復元木製銅版画プレス機で刷っている人がいた。プレス機の具合を尋ねると、調子が良いとの答えだった。

リトグラフの場合、ヨーロッパの美術学校や版画工房では現在も木製リトプレス機を使用しているところがある。今も使用され続け重宝されている理由に、金属製リトプレス機では味わえない木製リトプレス機ならではのしなやかな印刷圧を生み出すからだ、その魅力を語る者も多い。

では、木製銅版画プレス機の場合はどうか。回転ハンドルを回すための強い力が必要なため、敬遠されたのだろうか。強い荷重のため木製ローラーが頻繁に割れたのだろうか。

1758年（あるいは1773年）に出版された『腐蝕銅版画技法』第四版にも、ディドロ、ダランベールの『百科全書』の「銅版印刷」の項目の図版にも、歯車付銅版画プレス機の図は見当たらない。ハンドルを回す労力軽減のために歯車をプレス機に取り付けて利用するには、産業革命まで待たなければならないと考えられる。

調査で美術館や博物館を訪ねると、片隅で忘れ去られた存在という印象を与える木製銅版画プレス機。美術館が所蔵するにも拘らず、その由来について不明な場合が殆どである。

本稿で取り上げたブリュッセルやナミュールの木製プレス機についても、フェリシアン・ロップスが使用したと思われてはいるが、果してどうか。

1875年に描かれたポール・マテイの「フェリシアン・ロップスの肖像」¹²という油絵がある。もしブリュッセルやナミュールの所蔵する木製プレス機がその中に描かれていたなら、確かにロップスが使用したといえるだろう。しかし、刷り上ったばかりの銅版画を入念に見るロップスの前に描かれているのは、金属製銅版画プレス機である。

アド・ステインマン氏の木製銅版画プレス機リストには、筆者自身まだ確認していないものが少なからずある。

簡単な道具1本で分解、組み立てができ、しかも軽い木製銅版画プレス機を上層階の部屋まで容易に運搬できたことは、揮発性溶剤などを使って版画の作業をしていたことを考えると、当時としてはもっとも体に優しくまたエコロジーなプレス機だったと認識させられる。アパルトマンの最上階の屋根裏部屋に、今もひっそりと眠っている木製銅版画プレス機が、案外ヨーロッパにはあるかもしれない。

日本においても東京藝術大学美術館のほか、まだ見知らぬプレス機がどこかに埋もれている可能性は十分ある。『都の魁』（石田有年編、1883年、1971年）の「摺物工の部」の中に木製銅版画プレス機が描かれている挿絵があるが、このような和製銅版画プレス機が日本のどこかに存在するかもしれない。

付記 本研究の調査にあたり、平成19年度発展研究として金沢市より交付金を取得した。

註

- 1 ボスの腐蝕銅版画技法書は、『17世紀フランス銅版画技法の研究 アブラム・ボス「酸と硬軟のワニスによる銅凹版画技法」』（訳者：川上明孝・上田恒夫・保井亜弓・神谷佳男 金沢美術工芸大学美術工芸研究所 2004年）に全訳されている。
- 2 『L'imprimerie Histoire et techniques』（Michael TWYMAN ENS ÉDITIONS Institut d'histoire du livre/Les Amis du Musée de l'imprimerie, Lyon, 2007）の中で、著者Michael Twyman氏は、「… 70台近くの木製手引き印刷機は現在まで生き延びている。そのうちの7台はアントワープのプランタン・モレトゥス博物館が保管する。……銅版画用木製円圧プレス機は、かつてかなり普及していたに違いないが、今日では木製活版印刷機よりも珍しい。」（p.43-44,47、筆者訳）と述べている。現存する木製銅版画プレス機の正確な台数には触れられていないが、木製手引き印刷機の総数が70台程なので、それ以下の数になろう。
- 3 『KRONIEK van het Rembrandthuis 96/1-2』の中のAd Stijnman氏が書いた「De ontwikkeling van de houten etspers,1460-1850」によると、18台の木製銅版画プレス機が存在することを述べている。ステインマン氏のプレス機のリストには、東京藝術大学美術館所蔵のプレス機は掲載されていないため、その木製プレス機1台を追加すると、全世界に19台以上の木製銅版画プレス機が存在することになる。
- 4 『Traité des Manières de Graver en Taille-Douce sur l'Airain, Par le Moyen des Eaux Fortes & des Vernis Durs & Mols. D'imprimer les Planches & de construire la Presse par le Sieur A. Bosse. Augmenté de la nouvelle manière dont se sert Monsieur Le Clerc Graveur du Roy』 Paris, 1701 (p.57)
- 5 『De la Manière de Graver à L'Eau Forte et au Burin. Et de la Gravure en Manière Noire. Avec la façon de construire les Presses modernes, & d'imprimer en Taille-Douce. Par A. Bosse, Graveur du Roy. Nouvelle Edition Revûe, corrigée & augmentée du double, et enrichie de dix-neuf Planches en Taille-Douce.』 Paris, 1745
- 6 id. (p.136)
- 7 id. (p.135)
- 8 『腐蝕銅版画技法』（1645）（p.60）
- 9 『De la Manière de Graver à L'Eau Forte et au Burin. Et de la Gravure en Manière Noire. Avec la façon de construire les Presses modernes, & d'imprimer en Taille-Douce. Par A. Bosse, Graveur du Roy. Nouvelle Edition Revûe, corrigée & augmentée du double, et enrichie de dix-neuf Planches en Taille-Douce.』 Paris, 1745 (p.134)
- 10 プレス機についての説明文の全文は、次のとおり。
「PRESSE EN TAILLE-DOUCE EN BOIS
Cette presse est généralement considérée comme étant celle ayant appartenu au graveur belge, d'origine namuroise, Félician Rops (1833-1898). Elle est constituée d'un bâti de bois dont les montants creux reçoivent les axes des deux cylindres et les blocages souples (carton, feutre, …) qui assurent la pression entre ces cylindres. Le plateau mobile passera entre les rouleaux de bois et entraînera avec lui la matrice de métal encrée, le papier et les langes de protection. Lorsque l'ensemble aura subi le cylindrage, il s'agira, après avoir levé les linges de <<démouler>>le papier de la gravure et de le mettre à sécher soit, à l'origine, en le suspendant à un fil, soit aujourd'hui, en le plaçant entre deux cartons.」
- 11 筆者が見た木製銅版画プレス機は、以下の美術館、博物館に所蔵されている。（ブリュッセルを除く）
ルーヴル美術館（フランス・パリ）
印刷博物館（フランス・リヨン）
プランタン・モレトゥス博物館（ベルギー・アントワープ）
フェリシアン・ロップス美術館（ベルギー・ナミュール）
東京藝術大学美術館（日本・東京）
- 12 『Portrait de Félician Rops』 Paul Mathey 作, 1875年
Musée National du Château de Versailles et du Trianon

図

- 1 『Traité des Manières de Graver en Taille-Douce sur l’Airin par le Moyen des Eaux Fortes,& des Vernix Durs & Mols. Ensemble de la façon d’en Imprimer les Planches & d’en Construire la Presse,& autres choses concernans lesdits Arts』
A. BOSSE, Paris, 1645年 (p.63)
金沢美術工芸大学附属図書館蔵
イメージ・サイズ 134 × 85 mm
- 2 id. (p.59)
イメージ・サイズ 132 × 79 mm
- 3 ベルギー、ナミュール市にあるフェリシアン・ロップス美術館正面 (Musée Provincial Félician Rops)
2008年1月筆者撮影
- 4～7 フェリシアン・ロップス美術館所蔵の木製銅版画プレス機
2008年1月筆者撮影
- 8 フェリシアン・ロップス美術館内のキュージーヌ (cuisine) と呼ばれている部屋にある木製銅版画プレス機。美術館従業員用休憩室兼キッチンとして利用されている部屋にあり、美術館従業員及び、関係者以外に同機を公開できる状態ではなかった。
2008年1月筆者撮影
- 9 印刷博物館 (Musée de l’Imprimerie, 4 Boulevard de l’Empereur, 1000 Bruxelles) にある木製銅版画プレス機
2008年1月筆者撮影

(かみたに・よしお 共通造形センター／銅版画)
(2008年10月31日受理)